

哲学カフェで「対話」する

●クルミドの朝モヤ

日曜朝の「モヤモヤ」

10月のある日曜日の朝9時。西国分寺の駅の近くにあるカフェ「クルミドコーヒー」に、三々五々人が集まってくる。15人ほどの人が集まったところで始まったのは「クルミドの朝モヤ」という「哲学カフェ」である。

店のブログでは、「珈琲を片手に（中略）『正解』のない問いについて、自分や他人の声に耳を傾け、言葉を交わす場のことです。会が終わった後も、そこでのやりとりについて考え続けてしまったり何かふとした瞬間に、『はっ！そういえばあれってこれと関係あるかも…』などとひらめいたり。会の最中もその後も『モヤモヤ』するということで、いつの頃からか『クルミドの朝』改め『クルミドの朝モヤ』と呼ばれるようになりました」と紹介されている。

その日集まった人が簡単に自己紹介をした後（参加者は性別・年齢まちまちで、地元の人がいれば、埼玉から来た人など、バラバラだ）、進行役の深田英孝さん（社会起業家）から2つのルールが示される。それは「話すよりも聞く」と「違いを楽しむ」こと。つまり、人が話していることは最後まで聞き、さえぎって自分が発言しようとしな、ということと、議論ではないので、人の考え方が自分と違っていても、否定せず、違い自体を楽しむということだ。

モヤモヤを「問い」にして話し合う

プログラムの内容は、前半1時間で、それぞれが今モヤモヤしていることを「問い」の形で出し合い、その中から一つのテーマを選んで後半1時間自由に

話し合うというもの。

前半に出てきた「問い」は「あなたはなぜ生きているのか」という大きなものから、「断捨離ができる人とできない人はどこが違うか」（自分がものをなかなか捨てられないので）という生活に直結するもの、「どういうときに逃げてよくて、どういうときに逃げてはいけないうか」（新聞記事に、いじめられている人は逃げろと書いてあったが……）という社会的なものなど15～16テーマ。

その中から決まった後半のテーマは「どういうときに気を遣い、どういうときに気を遣わないか」。出題者によれば、テレビ番組で「日本は気がつかいすぎ社会」と言っていたことがきっかけで、気を遣うときと遣わないときの区分や、相手の人との距離感が気になったので、とのこと。話が進むにつれ、気を遣うことと思いやりは違う。気を遣うときには見返りを求めていることが多い。プレゼントをするときに気を遣いすぎて、何をあげていいかわからなくなる。何が欲しいか聞くことと、聞かないこと、どちらが気を遣っていることになるのか。相手がどれだけ



西国分寺駅の近くにあるクルミドコーヒー

自分のために時間や労力を使ったかを想像して感謝することも気遣い。気を遣うのは関係欲、気を遣わないのは支配欲。個人的な関係もそうだが、パブリックな行動でどう相手に配慮するかが問題等、それぞれの参加者からさまざまな意見や考えが出てくる。進行役は話が行き詰まってきたときには視野を広げたり、意見が拡散したときには少し整理をするといったことをするが、一つの意見にまとめることはせず、いろいろな意見が出るにまかせている。

予定の時間が来たところで会は終わりとなる。結論が出るわけではなく、紹介どおり、なんとなくモヤモヤした状態をかみしめつつ、帰っていく人もいれば、その場に残り、コーヒーやケーキを注文し、会話を続ける人などさまざまである。

最近、こうした「哲学カフェ」が増えている。専門的な知識を披露し合うわけではなく、社会生活の中で気になることや世の中で議論されていることを、集まった人同士で自由に話し合う。いろいろな形式や方法論はあるが、どの場にも共通するのは、テーマについて自由に「ことば」にして話をするということ。安心して自分の考えをことばにできる場に価値があるようだ。



クルミドコーヒーのブログで「クルミドの朝モヤ」の予定を知ることができる
<http://ameblo.jp/kurumed/theme-10062470924.html>

●銀座哲学カフェ

哲学対話との出会い

丸山剛さんは、「哲学カフェ」に魅了され、自分でその場を立ち上げた一人だ。インターネット広告の会社を営んでいる丸山さんは、自社で所有する銀座と東日本橋の2つの場を拠点に、2014年から「まなび創生ラボ」という、時代にマッチした学びや仕事のスキルをみんなで考えることを目的に社会人と学生が共に学ぶ勉強会やワークショップを開催する活動を行っている。その一環として、2016年1月から、ファシリテーターとして高千穂大学哲学研究会パイディアの齋藤元紀氏（高千穂大学人間科学部教授）、染谷昌義氏（同准教授）、松丸啓子氏（同教授）を招いて「銀座哲学カフェ」（通称「銀哲」）を開催しているのだ。

丸山さんは、以前大学の広報の仕事でインタビューをした教授から、これからの学生や社会人に求められる能力は「問いを立てられる」ことだと聞いてずっと気にかかっていた。そんな中、2年ほど前に行ったワークショップ研究会で、「哲学対話から学ぶ問いの立て方」という言葉と出会い、「哲学対話」について調べ始めたところ、幼稚園児から社会人に至るまで、さまざまな年齢の人を対象にした「哲学対話」や「哲学カ

フェ」が行われていることを知ったのだという。

哲学カフェの有効性

仕事柄、多くの学生や社会人と話をする機会の多い丸山さんは、日本の社会では、どちらが正しい答えかを対立関係で競う「議論」や、お互いに空気を読み合って当たり障りのない言葉をつなぐ「会話」が多いことが気になっていた。一方でネット上には他者を一方的に否定する罵詈雑言も飛び交っている。こうした中、「哲学対話」や「哲学カフェ」について理解を深めるうちに、これから重要なのは、何もないところから、あらかじめ正解の決まっていな事柄についての問いを立てること、皆で自由に話し合う「対話」によって問いに対する納得できる解を見つけられる機会やマインドを持つということ、そのような機会やマインドを育てる場として「哲学対話」や「哲学カフェ」が有効だということに思い至ったという。

銀座哲学カフェの基本はクルミドと同じく、誰かが話しているときはその話をさえずらず、否定もしない（別の意見は別の意見として誰かの否定ではない新たな意見として発言する）というセキュリティのある（安心して自分の意見を表明できる）対話の場であることだ。丸山さんは、こうした対話の楽しさは、日頃自分がぼんやりと感じていたり、ことばにならない思いを抱えていることを改めてことばにして意見として表明することにより、他者と自分の違いを発見するとともに、自分とは違う発言によって新たな自分が引き出されることにあるという。多様な人の意見をフラットに聴くことで、それぞれの人の発言がなされる背景への想像力も



パイディアのサイトで「銀座哲学カフェ」の告知がされている
<https://paideiatakachihophilosophy.wordpress.com/>

生まれ、他者をむやみに否定するのではなく、人間は面白いと思えるようになるのだそうだ。また、逆に自分の意見を否定されず、聞いている人からそのまま受け取ってうなずいてもらえることにより、一種の自己肯定感が得られることも哲学カフェの効用の一つだという。

時代の変わり目にこそ必要な「問い」

時代の変わり目には哲学が流行するそうだが、丸山さんはまさに今の日本がその時代の変わり目だと考えている。こうした時代にはこれが正解というものがないからこそ、正解を性急に求めない「問い」の姿勢が大切であり、一人一人が自分自身の「納得解」をじっくりと探求することが自分自身の幸福につながるのではないかという。

「銀哲」では、ただ皆で話をするだけでなく、暗闇での哲学対話や、演劇形式で対話をする「哲学ドラマ」、事前に与えられたテーマに合った写真を撮ってきて対話をする「銀ブラ写真de対話」といったちょっと趣向の変わった哲学カフェも開催している。丸山さんは今後も定期的に哲学カフェを行っていくと同時に、対話の場をより広げ、企業の採用面接に哲学対話を取り入れる提案などもしていきたいとのことだ。



まなび創生ラボのサイト <http://mana-labo.com/>

●なぜ、いま、哲学カフェなのか

哲学カフェとは何か

哲学カフェはフランスの作家・哲学者マルク・ソーテが1992年にパリのバステューのカフェで哲学を話し合う会を始めたことから運動として広がったという。「日常生活に役立たない哲学は意味がない」というのがソーテの考え方だった。「安楽死は必要か」「暴力とは何か」「生に意味はあるのか」。こうした問題をテーマに、最盛期には毎週日曜日150人が集まり、マイクを握って話し合ったそうだ。彼はこの運動を「ソクラテスのカフェ」(café for Socrates)と呼んだ。この呼び名は彼の1995年の著書のタイトルとなった。

日本の哲学カフェの草分けともいえるカフェフィロ(大阪大学臨床哲学研究室から2005年に発足した哲学対話の実践・支援団体)のサイトでは、哲学カフェは以下のように説明されている。

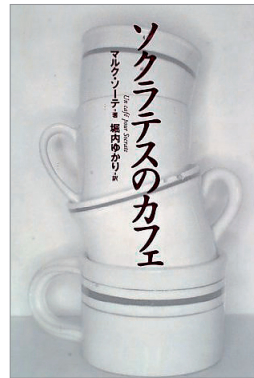
哲学カフェとは街中のカフェなど誰もが自由に出入りできる場所で、飲み物を片手に参加者同士で特定のテーマについて話し合う営みです。1992年にフランス・パリのカフェで偶然生まれ、その後世界中に広がっていきました。哲学カフェに決まった定義があるわけではあり

ません。共通するのは、進行役がいて、テーマを設け、その場にいる人たちが話して聞いて考えるというシンプルなつくりです。ですから主催者や進行役によって雰囲気がちがってきます。徹底討論する、じっくり対話を進める、その場でテーマをつくる、進行役がテーマを提示する、哲学の知識・歴史をフル活用する、日常経験を活かす、などなど。

哲学カフェの広がりの背景

哲学カフェは全国各地に広がっており、また、哲学についての人々の関心もここ数年高まっている。哲学をわかりやすく解説した入門書が話題になったり、「子どものための哲学対話」を授業に取り入れる小中学校が増えたり、NHKの情報バラエティ『あさイチ』で哲学が取り上げられたりした。

ただ、今の哲学カフェへの関心の高まりは、哲学の知識や哲学者の思想への関心の高まりというよりは、人と何かにについて深く対話することへの欲求の高まりの表れといってよいのではないと思われる。生活者は、家庭や職場、学校といった日常的な生活の場ではそうそう深い対話ができるわけではない。お互いに空気を読みつつ表面的な社交辞令や情報交換的な会話をしがちである。あまりまじめなテーマで話し合うことを突然提案すれば、「引かれ」してしまう可能性も高い。また、SNSなどのタイムライン上では、あるテーマについてさまざまな人が意見を開示することもあるが、



哲学カフェについて学ぶ2冊の本

『ソクラテスのカフェ』(マルク・ソーテ著、紀伊國屋書店、1996年)
『哲学カフェのつくりかた(シリーズ臨床哲学)』(松川絵里他著、大阪大学出版会、2014年)



あくまで顔の見えない一方的なことばのやり取りであり、しかも、じっくり考えて発信するというよりは、瞬間的に反応してシェアしたり気の利いた一言を返すことが求められる。

しかし、哲学カフェという場においては、あまり近すぎない相手と、一定のルールを守りさえすれば自由に安心して、答えのないテーマについて自分の意見や考えを交換することができる。さらにそうした対話を行うことによって、自分自身の考えが軌道修正されたり、思いがけない人生へのヒントを得たり、モヤモヤとした思いに形が与えられたりすることもある。そのような場を持つことの必要性を感じる生活者は、これまでの正解が通用しない今の時代環境の中で確実に増えていると思われる。

企業にとっても、哲学カフェの考え方は非常に有効であると考えられる。なんらかの答えを出すための会議やワークショップもよいが、たまには、答えのない問いを立てて、それについて自由に対話することにより、職場の風通しがよくなったり、これまでない事業の種が芽吹くこともあるのではないかと。



カフェフィロのサイト <http://cafephilo.jp/>